

<今日の説教のポイント フィリピの信徒への手紙 4章4-7節>

「思い煩うのはやめなさい」(6)という言葉の起点にして御言葉に聞いて行きましょう。確かに、私たちの回りには、思い煩いの種がたくさんあります。いろいろな形の争い、戦い、テロの脅威、地球の存続を心配させる温暖化や汚染の進行、個々人の人間関係、病気、老後、経済の問題等々。それらが現実の思い患いとなる根底には、一つの根源的な不安が横たわっていると言えるようです。それはすべてのことを自分の力で解決しなければならないとする思いから出て来る不安です。私たちは、「全能の神を信じます」と言いながら、万事を自分の力で切り開き、確かで良いものにしようとする、しかしそんな力は自分にはないものですから、そこにですから、「思い煩い」は思い患いが生まれて来るのです。ですから、「思い煩い」は、神なしに自分だけで全部しなければならないし全部できると思っている「思い上がり」だと言っている人があります。

主イエスも「思い悩むな(思い煩うなと同一語)」と教えられました(マタイ6:25以下)。「あなたがたのすべてを知っておられ、あなたがたを養ってくださる天の父がおられるではないか」というのが、その理由(根拠)です(マタイ6:26、30、32)。パウロが「思い煩うのはやめなさい」と言ったときも、それと同じことを考えているのです。この個所の全体が「すぐ近くにおられる主において常に喜び、…何事につけ、感謝を込めて神に打ち明けるなら、(その)神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリストによって守るでしょう」と、父なる神と御子なる神キリストに密着していることの深い含蓄を聞き逃してはなりません。そのような神信頼は、「何事につけ、感謝を込めて」神に願うという祈りという形を取って現れます。親に信頼し切っている幼子は、何事につけ、「ねえ、ねえ」と親に報告し、訴えかけます。私たちも神に対してそうしたら良いのです。近くにおられる神への確信をもつてのその祈りを、神はしっかりと聞いて、必ず良い道を備えて下さる — その思いが、私たちの心から思い煩いを追い払うのです。

そしてさらに、そのような、祈りの中に起きる思い患いからの解放は、人知を超えた神の平和の中に私たちを包み込むようにまですります。神の思い、神の道は、私たちの思いをはるかに超えて、私たちの心にある事によい決着をつけてくださる — そのことを信じて私たちは歩んでよいのです。